



ニッポン
ドクター和の
臨終図巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療まで「人を診る」総合診療を目指す。「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

平成の最後の金曜日、この連載をまとめた単行本『平成臨終図巻』の出版を記念し、大阪でトークライブを行いました。

私は、歌う町医者。「どんな薬よりも歌が人を癒すことがある」が信条です。今回は臨終図巻ということで平成に亡くなった人の曲だけを追悼の意を込めて歌いました。中でも胸が詰まったのは『雨上がりの夜空に』。RCサクセションの金字塔的作品です。

日本ロックの神様、忌野清志郎さん。亡くなってからもう10年がたつてしまいました。2009年5月2日、がん性リンパ管症のため死去。58歳でした。

104 歌手 忌野清志郎



忌野さんに喉頭がんが見つかったのは、06年夏のこと。治療に専念したいと活動休止を宣言します。そして見事克服し、翌年12月のジョン・レノン追悼ライブで復活。3カ月後の08年2月には、「完全復活祭」と題したライブを日本武道館で決行し、ファンを安堵させました。しかし、そのわずか5カ月後に、左腸骨に転移が見つかります。「心配はしないでくれ。こ

のくらのことは覚悟してたんで、ぜんぜん凹んでないから。ブルースはまだまだ続いているというわけだ」とメッセージを発表し、再び活動休止となりました。

病床でも音楽を作り続け、最後まで夢を持ち続けながら、力尽きて旅立ちました。訃報を知ったとき、呆然としたのが昨日のことのようです。

一部の報道によれば、喉頭がんと診断されたとき、声帯摘出手術をする声が出せなくなるからという理由で、清志郎さんは手術を拒否。抗がん剤治療と食事療法を選択したと言われています。

医師としては、たとえ歌えなくなっても手術を受けて生きてほしかったと思います。同じ喉頭がんで、手術を受けて声も失って生きることを選択したつくくさんのことを重ねて考えてい

ます。歌手にとって声は命。でも、死んでしまえば元も子もない。手術を受けるのも受けたくないも、本当に辛く苦しい選択です。

だけど、どちらが正解だとか不正解とか、そんな話では、ない。清志郎さんは間違っていたなんて言う医者は放っておきましよう。

復活祭で再びステージに立てた時の清志郎さんは、最高に幸せだったはず。あの日の伝説は、今も多くのファンの胸に生きています。

とは言え、この10年。さまざまな出来事が起こるたび、もし清志郎さんが生きていたら、どんな歌を作ったろうかと考えてばかりでした。既成概念を疑えという想いを歌に込め続けた彼に、令和の世はどんなふう映ったのでしょうか。デイドリームビリーバー。夢を信じて、新時代を生きていきます。あなたの分も。

声が出せなくなる——声帯摘出手術を拒否